

Leontodo N-ro69 別冊

シベリヤ同志を訪ねて

1982年8月「小樽市民友好の船」

星 田 淳

シベリヤに同志を訪ねて

1982年8月、「小樽市民友好の船」

星田 淳(苫小牧)

'81年、長年の korespondanto, Taŝkent (ソ連, ウズベク共和国)の Petro Poliŝćuk が死んだ。

'82年6月、ふと新聞でウズベク展の予告を見、会場の日ソ文化会館(平岸)へ行き、彼をしり込んだ。その時ふと目にとまつたのが、この「小樽市民友好の船」のビラだつた。これがきつかけで参加することになつてしまつたのだから、mia kara, bedaŭrata S-ano Petro に誘われての旅行のような気がする。もつとも Taŝkent は訪問予定になかつたが。

長年の plumamiko, Irkutsk の S-ro Filippov と、Vladivostok の Delegito de UEA, S-ro S. Anikejev には訪問を通知。

Anikejev からは出発直前、Bonvenon の返事。訪問予定は小樽の姉妹都市ナホトカのハバロフスク、イルクーツク、バイカル湖、ASE (Asocio de Sovietiaj Esperantistoj) にも一文送り、ナホトカ、ハバロフスクの同志の紹介を依頼。

出発は8月17日11時、小樽港第3埠頭、船はソ連船オリガ・サトフスカヤ。一行は市長を団長とし、市会議長、議員、市各界代表、一般市民、主婦、ママさみシーチームから、向うで青少年キャンプに参加する小学生グループと多彩。

乗船後すぐ自分の部屋を探す、聞くにも船員はロシア語。ロシア語の教詞だけをべてみても、まあ通ずる。市消防の音楽隊、市民多数の歓送のたかでの出港、船室は4人用、シャワートイレ付き、食事は船内アナウンスで順次食堂へ。食事はやはりロシア風か、黒パン(というがかなり白い)スープ、野菜サラダ、肉料理など。時にはめん類や米飯もあつたが日本人向きに工夫したものか。昼は「牛一本」とニツカノースランドが出ていた。夕食にはサンポロのかんビールが「小樽市からです」と配られる。後、「ナホトカ市からです」もあつた。食堂のサービスはもち論ソ連女性、キャンプは背の高い肩章のついた制服の女性。食堂のそばにはバー・ホールがあり日中は映画上映、夜はコンサートがあつた。バンドつきの歌や踊りとなると、ロシア人はやはり日本人とは全然違う才能があると見えて一方的に向うのペース日本人はそのあとカラオケ大会。どうもかなり質が違うようだ。

バーへ入る。マスターはワレサ風の口ひげのサーシャ、英語も結構話す。ウラジボストクの家で妊娠中(7ヶ月)の奥さんがいるという。

日本海は静かだった。18日の夜が明けると霧。霧はれる10時頃、もう右手に大陸の山々が見えている。沿海州シホネアリエ山脈だ。次第に近づき海岸線に沿うように進む。海に沿って建物群、山の上に送電線鉄塔、アンテナらしい高い塔などもあちこちに見えてくる。ナホトカの港は広いアメリカ湾の奥のノビツキー半島に守られたナホトカ湾にあり、二重の湾の奥で防波堤が全くない(必要ないのだろう)自然の良港。石油基地、商港、漁港が並列して、ツメリカ湾の東側に更に深く入りこんだウランゲル湾にウオストーチヌイ港(東港)が建設中。

ソ連の夏は4時間とか、日本の時刻より2時間進んでいる。昼食後、ソ連側税関吏が各車を廻り通関手続。外貨申告の書類審査が主で簡単。「ソ連のおかねありますか?」「ありません。」「地図、録音テープ(録音した商品のことか)は?」「ありません。…」でパス。15時着、(日本時間13時だから26時間の航海)埠頭の市民歓迎集会へ。かなりの市民が集っている。タツプを降りると子供たちが一人ひとりに花一輪をくれる。演壇では両市長のあいさつ(迎訳つき)「我々の間の解決すべき問題のなかには、長い時間を必要とするものもあるでしょう……」との志村小樫市長の言葉は、領土問題をさすものである。あいさつのはじめは歌、踊り。外川北大教授の話ではウクライナのものがつたとのこと。やはりスラブ人の歌、ダンスはすばらしい。

バスに分乗し市内へ向うことになったが、そこに待っていたのが S-ano Sergej I Anikejev だった。ウラジボストク(Vladivostok, 以下V.)の若き指導者、UEAのdelegitoでもある。3年前にESPを始めたとはとても信じられない正確な美しい発音よどみなく流れる弁舌。みごとなesp-istoだった。V.大学東洋学部卒、日本語のガイドもやっていたが、生活が不規則になり自分の時間がなくなるので、止めて今の職場(家具工場)に帰ったとのこと。Inturist(ソ連国営旅行社→ソ連内の外国人旅行者は皆これの世話になる)のガイド等も同窓の後輩たち、了解を得て同乗して話し合う。ガイドは市内の説明。二つ並ぶアパート群

レストラン、映画館など。目立つ高い建物の壁に、敦賀～ナホトカ～小樽 姉妹都市の bareliefo, 大きく見事なもの。小樽駅前にあるあの壁は、とても気がひける感じ。V.のESP運動は遠く1891年に始まり、日本人(二葉亭四迷)に1902年、初めてESPを伝えたのもV.のPostnikovだつた。一時とだえた伝統は1979年このAnikejevのgvidoで復活。1981年Z祭には展示、朗読、音楽、ダンス等の夕べを開き百名ほどを集めた。

話しながらガイドの話も聞き、窓外の景色もみる、なかなか忙しい。季節は北海道とほぼ同じか。日高山脈を思わせるような岩の層を切り開いた道をこえるとナホトカ湾の外側へ出る。道ばたにはヨモギ、エノコ草か穂を出し、ハギ、オミナエンの花ざかりだつた。ガイドは黒沢 明が来て「デルス ウザーラ」を撮つた時のことを話す。Anikejevの話ではV.にもArsenjevに関する資料が博物館に多いとのこと。

多くの市民の足はバス、タクシーのようだが、ピカピカの小型車もかなり走っている。全員シートベルトをしているが、法の規制があるのだろう。(小型車だけ) 体育館でママさんバレーチームと当市のチームの試合。ナホトカ側は20才前後の若い人ばかり、当然勝負は予想通りだつたが一時は逆転したりで面白かつた。それを見ながらの会話

A「新聞で見たが東京で右翼が北方領土奪還のデモをやつたとか、北海道ではやらないのか？」

H「札幌でもよく宣伝している。しかし昔から日本人が住んでおりそこを追われた人も北海道に多くいるし、返してほしいというのは日本人皆の気持ちだと思う。」

A「日本は米国と安全保障条約を結んでいるね。日本は米国に軍事基地を提供するときめている。あの島が日本へ返つたら、そこにソ連を狙う米軍基地が当然できると思われなければならない。それがわかつていて、ソ連が島を返せると思うか？」

H「北海道、千島、サハリン(樺太)を含め、平和非武装地域にしようとの意見を見たことがある。いい考えと思う。日・米・ソ三国でこれを了解して...」

A「アメリカが了解すると思うかい？」

H「困難はあるだろう。しかし、北海道民で、米軍基地を作るために島を返してほしいと考える者はいないと思う...」

どうも話は現実から少し離れた感じ。その後の中曽根内閣の方

向、三沢基地へのF16配備等みると、なかなか現実は厳しい。相互の信頼感がなければ、何でもいい方向に行くはずがない。ルーズベルトの言葉を思い出す。「もつとも恐るべきことは、恐怖それ自体である」 La plej timinda estas timo mem 一か。原文は記憶怪しいが The greatest thing to fear is fear itself. だつたかな。「疑心暗鬼」ほど恐ろしい(危険な)ものはない」といえようか。

個人対個人でこの位は話せるが、政府対政府は？これから先を進め解決するのは政府間の仕事だろう。信頼感をつくり出すためには、我々が国境をこえて、こんな話が出来る状態をひろげて行きたい。

市内を一巡した観光バスは港へ。ここでS-ro Anikejevと別れる。この若さとエネルギーあふれた指導者のもとに、ソ連極東のE S P.運動の発展を期待したい。

夜再び上陸。レストラン Horizont で「小樽・ナホトカ姉妹都市交流の夕べ」立食パーティ。初めの両市長のあいさつなど儀式が終り、乾杯、歓談・・・となると直ちにコトバの隣、あちこちに通訳が漸置されているが、日本側だけで二百人にはとても足りない。出国前、泥縄式にやつたロシア語も、ようやくあいさつ程度。近くの青年グループに英語を少し話す人がいた。造船所で働いているという。「エスペラントの鍵」ロシア語版や、Rusa E-Vortaro を持つていつたのが案外役に立つて、片言ロシア語と英語で、お互いの身のまわりのこと(家族、職場)位は、何とか通じたもよう。双方からのだしものがステージに出るが、歌と踊りでは、やはりスラブ人の迫力に圧倒される。片言会話や乾杯のあいまに記念品交換。小樽市から支給されたバッチ、個人負担で持参のボールペン、百円ライターなど、手がるなものが主。向うからもらうのもバッチ、絵はがきなど。

8月19日(木)曇。買店へ。ソ連式ショッピングは、客が商品を見て買う物をきめると、その係が伝票に記入、客はそれを持って会計へ行き代金を払つて領収印をもらい、もう一度もとの品物係(?)のところへ行つて品物をもらう。万引はできないが非能率な手順だ。ナホトカ歴史博物館を見る。出来たのは最近らしいが、古い資料もかなりある。革命前からシベリア鉄道沿いにロシア

人、ウクライナ人が東へ移動してきたことと、1859年ロシア軍艦「アメリカ」によるアメリカ湾と、その奥のナホトカ(Nahodka, signifikas "eltrovita")の発見。前大戦の終る時のソ連参戦の記録もあつた。旧満州、樺太の地図にソ連軍進入の矢印。「こうしてサハリンとクリルはソ連に帰つて来た」とある。「帰つて来た・・・というがエトロフ、クナシリはロシア領だつたことはなかつたんだからこれは違つてます。」と外川教授。同行の元ソ連抑留者の話でも、あの頃岨んの海岸の村落にすぎなかつたナホトカが今人口15万余の港湾都市になつたのは、すばらしい発展といえる。

昼食はホテル・ナホトカのレストラン。昼間、店内の電燈はみな消してある。シベリアで巨大な水力発電をやり、石油も自給できるエネルギー大国なのに、この省エネぶりはみごとなもの。停電でない証拠には屋上の広告電光板がちゃんと今日の日付、曜日、時刻、温度が出ている。博物館では電燈がついていたが、あそこは窓がほとんどたかつたし、消されたら展示物など見えないので当然だつたようだ。ホテルの前、昼頃ぞろぞろ人が通る。30分位すると逆方向へ。どうも職場から近くのアパートへ昼食のため帰る人達のような。そこから更に一段下つて駐車場、その向う、小川をへだてた草原のあたりが、かつての捕虜収容所の場所だという。抑留経験者には思ひ出の場所。しかし同じなのは附近の地形と橋ひとつ、あとはすっかり變つてしまつたという。ナホトカ東港へも船で。新しい建設中の港。チップの山。

一旦帰船、荷物をまとめてバスへ。シベリア鉄道の始発駅へ。Tiho Okeanskaja (Pacifika Oceano)、即ち大平洋駅へ。かつて始発駅はVladivostokだつたが、Vは外国人立入禁止だから外国人にとってはここが始発駅。子供のころの記憶にある中国の列車と同様、大きい客車。改札口なく、プラットホームへは誰でも自由に入れる。一輛に荷物室、車掌室、備品室、それに客室と便所。一室四人、二段ベットになつている。

列車は何のアナウンスもなく(定刻19:50)発車。海が次第に遠ざかりPartizansk川のゆるやかな流れに沿つて内陸へ。街を離れるともう草原、林をつれだつて飛ぶのはカササギ、日本にはいない鳥。(実は佐賀平野にだけ住み、天然記念物)。所々人家のまわりには野菜、ヒマワリ畑。沿線の植物、北海道とそう變つていない。ナホトカに多かつたが、ヨモギ、ツリガネニンジン、オミナエシ、ハギの花

盛り。 オオバコ、ゲンノシヨウコ、ヤナギタンポポの花、ポプラ、エルム、
トロの木など。 ただ、ススキとイタドリの見えないのがふしぎな感じ。
やがてPartizansk。 中国式の名スーチャン(蘇城)をロシア化した
もの。 炭鉱で知られる。 粉炭の山。 線路はカーブが多い。 気
がつくとトンネルが全くない。 この鉄道の開通は1916年。 平野で
育つたロシアの土木屋は、トンネルが苦手で、鉄道もトンネルを作らず
にすむように谷をぬつて迂回させたのではあるまいか。 やがて左側
が広い草原に開けてくる。 この向うはハンカ湖、右側はシホテアリエ
山脈。 いずれもArsenjevとDersu Uzalaの調査行の舞台。 夕
やみ迫る。 左側 中ソ国境側に道路あり、照明が明かるい。トラック
も次々に通る。 同室3人でウオツカをのんで寝る。

8月20日(金)曇のち晴

明るくなる草原、線路わきにときどきヤナギランタの桃色の群落。 11
時、丘の上に高層アパートの大団地がつづく。 車内スピーカがロシア
語ニュースの音に八木節など流した。 サービスか。 11:19 ハバロ
フスク着。 車内アナウンスなし。 外ではスピーカから女性のアナウ
ンス、ロシア語。 ナホトカから乗つて来た日本人か?と聞きたいそうなお
下げの女性、ここで下りて行く。 話すことはロシア語だった。
アジア系ソ連人はかなり多い。

ハバロフスク駅前広場には、このまちを開いたハバロフの銅像、多く
の人々。 バスでホテルへ。 車道の両側、広い人道との境に沿つて
街路樹、これが大木で茂つた枝、葉で建物が見えない。 緑のカーテン
のすきまから重厚な石づくりのロシア式建築が見えがくれする。
ホテルは十階建のホテル・インツーリスト、アムール川(黒竜江)を見下す
丘の上にそびえる。 上から見ると広いアムールを船が上つて行く。
左手遠い川向うの丘、その向うは中国の黒竜江省、1945年の敗戦時
の混乱で多くの残留孤児を出したところである。 まちをちよつと歩
く。 夜、ポリシヨイサーカスを見に行く。 ところどころに日本語を
まぜたりサービスしてくれる。 日本でテレビにも出ていたが、すば
らしい演技。 象、馬、犬などたくさん出たが、皆よくもあれまで仕
込んだもの。 アムールの岸の公園、あちこちのレストランなど至る
ところで若者たちのパーティ、音楽、歓声は夜半零時になるとおさま
つた。 肩くんで帰る姿が木々の間に見えがくれする。 夜も気温25
度、暑い。

8月21日(土) 曇(晴) 晴(イルクーツク)

5時起床、バスで空港へ。今日はイルクーツクへ片道2360キロ(成田〜グアム間に相当)の日帰り旅行。霧で離陸がかなりおくれた。アムールの流れが遠く近く・・・眼下のシベリアの大地、山地は緑、低地は草らしいが、太陽が鏡のように反射して走るところを見ると、水はゆたかなようだ。シベリアの大地は水に浮かんでいるような感じだつた。バイカル湖の手前から高度が下り出す。下の白い雲が切れると青い湖面。13:52イルクーツク空港に着陸。ハバロフスクから3時間17分。バスでホテル・インツールリストへ行き昼食。長年のKorespodanto S-ro S.Filippovはロビーで緑星旗を持つて座つていた。食後バスでバイカル湖へ出発。S-ro Filippovもインツールリストの了解を得て同行。同行のママさんバレエ一行の質問を仲介しての会話。彼のユーモアにママさんたちもいたく感心。透すが見える林は、前大戦中、燃料不足で治ど切られ、戦後植えたもので、40年未満の若い木だとのこと。バイカルから出る唯一の川、アンガラ川の流出口あたりで休憩、記念撮影。新婚の車、ハバロフスクでも見たが、花やテープを飾つて走つている。やはりここでも車から出て記念撮影していた。S-ro Fは今、年金生活だが、以前働いていた時も長くESP運動をやつていたが、職場の責任者があまり好まなかつたとか。やりにくかつたことであろう。外国へ個人名で送金できないので、SEUができたとき、団体としての海外送金(ESP誌購読のため)ができると期待したが、支部を作らないと送金できない等制約があり、今のところSEU結成の利点はないとのこと。彼はヨーロッパ側ロシア、カザンの生れ、ロシア革命の時革命軍としてオムスク——イルクーツクに派遣され、そのままイルクーツクに住みついた人。この頃は時々エスペランチストの来訪があるとのことだつた。夏のバイカルはたゞ明るく、広かつた。その夜のうちにハバロフスクへ。

8月22日(日) 晴

ハバロフスク着は深夜1時、バスでホテルへ向う路上を見ると若い男女の姿がまだまだ多い。20日夜、若い人たちの各所のパーティの盛況に驚いたが、この人達、短い夏を爆発的に楽しむのか。明らかに未成年の少年、少女もいる。同行の主婦たち、青少年非行が気にたつてか、「あんな子供たち夜おそくで遊んでいいんですか?」とソ連のガイドに聞く。困つた顔で「あまりよくないで

す・・・」との返事。同室のH氏、ソ連ガイドに、1人で夜歩いても大丈夫かなと聞いてみた。「心配はいりません。大丈夫危い事はない。だけど、あなたなら・・・」と顔をみつめ、小指を出して「これに気をつけなさい。外国人に近づいて誘うのがいるそうです。」との返事だったという。彼は夜の公園の野外ディスコの騒音の中を歩いて廻つたが、幸いにして(?)そのようなタイハイの分子には出会わなかつたとか。

昼食の後アムールの岸を歩いていると、背の高い眼鏡の青年が近づいて来た。「こんにちは。質問してもいいですか?」はつきりした日本語。「ええ、どうぞ」しかし彼の日本語はやがて行きづまり、話は英語に切り替つた。サハリン生まれ、今Vladivostok大学東洋学部で朝鮮語をやつている、来年日本語をやるつもりなので、日本の都市について、写真・説明など日本語のものを送つてほしいとの話。協力を約束して別れる。13:00 ホテル前に一旦集まり、市内を皆でまわる。まづ、歴史博物館へ。すぐ隣の長い木造の倉庫のような建物、前世紀に絶滅したステラ海牛の骨格をつた。博物館の入口に初代館長Arsenjevの像。中にはDersu UzalaとArsenjevの、沿海州調査の時の写真もあつた。このナナイ族の狩人は森の動物の声、足あとからその行動を知ることが出来たという。また動物、人間すべて生きものとして区別しない自然観にArsenjevは深く感動している。エウエンキ、ギリヤーク、ナナイなど少数民族の説明の中にアイヌの説明もあつた(残念ながら訳めなかつたが)。

18:28 再びシベリア鉄道で南へ。ハバロフスクの外人用売店へ行つたら罐入りのサツボロビールがたくさん積み上げてあるので数本とウオツカもいくらか買ってあつたので、車中で乾杯。久しぶりのビールだが、やはり冷えてないとどうも。S-ro Filippovに聞いてみると「冷やすも暖めるも、それは飲む人が好きなようにやればよいから!」との返事。冷やす人は少ない。温めてのむ人の方が多いという。以前、Nuntema Burgarioの小説を読んでいると「Li eltrinkis varmigitan bieron」などあつて、はて? mal~が落ちていのか、と驚いたが、熱いビールをのむのは、東欧、ソ連を廻じてあるようだ。ナンシンの絵のついたピリピリするウオツカ、なかなかよかつた。

8月23日(月) 晴

所かわれば品かわつて、特に料理、他国のものは、なかなか口に

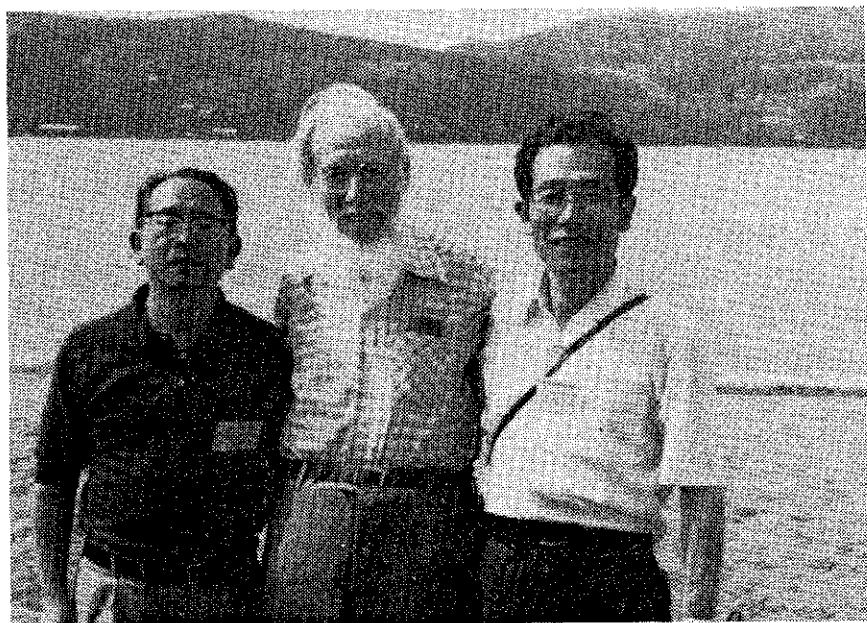
あわぬ事も多い。ロシア料理はまあましな方か。以前アメリカで油っこい料理にあきて、スーパーでパン、オレンジ等を買って自分でやつたのを思い出す。ここではあの菊ごたえ充分の黒パンの酸っぱい味がロシア人にはいいのだという。パン、バター、肉野菜、果物と、量は多いが、あとは好みの問題か。コーヒーには1 cm X 2 cm X 6 cmの細長い角(?)砂糖がついていた。9:25 ナホトカの終点、太平洋駅に響く。シベリア鉄道は予想外に発着時刻は正確で、おくれても5分位だった。税関へ行くと、外でソ連の子供とのキャンプをやつて来た小学生たち、お別れ会をやっている。やはり一週間の共同生活、心に通うものが出るはず、泣いている子たちもいる。握手、贈物交換、あいさつ、輪になつての囁り……。

こちらは最後の関門、税関を通る。実は両替の時長く待たされたので他人の分も両替してやつたため、多額のルーブルを持つて入国したのに、それ程買ったものも、領収書もないという結果になり、係官(アジア人女性)は不審に思つたらしいが、その上司は「かまわな」と通してくれた。正規の手続をふまなかつたのだから、疑われても仕方がない。今後は気をつける必要がある。帰国後外川教授が清新に書いていたが、申告もれの現金が発見され(虚偽の申告というわけか)何万円か没収された人があつたという。

入国前に、写真は、港や船、鉄道、空港など撮影禁止、車内、機内からの撮影も禁止……。と聞いていた。しかしナホトカ港も、鉄道も、ソ連ガイドは「どうぞ御自由に」と制限なし。ただ軍艦だけはさすがに「あれは遠慮して下さい」といつたとか。港での交流会でも、「撮影禁止」の立札はあつたが、日ソどちら側も大つぴらにとつていた。建前はあるが、現実には融通がきくというわけか。私にしても建前どりにいえば、かなりソ連の法を犯して出てきたことになる。考えて見れば、米・ソともに全世界にスパイ衛星をとばし、地上の自動車、船の数も皆お互いに知つている時代である。こんな禁止をしても意味はないと思うのだが。

来た時と同じオリガ・サドフスカヤは13:00に出港。東へ。8月24日(火)午後予定通り小樽港に入つた。

ソ連市民の印象として、もの静か、落着いている、悪くいえば、活気がない、というのが一般的らしい。私もそう感じた。ハロフスクの夜のエネルギーは、若い者なら当然だろうが、昼の街頭の印象はどうしてもそうなる。ふと、気がついた。街に看板がない！いや、実はあるが、本屋、化粧品、と表示してあるだけ。社会主義国だから、品物を宣伝し、多く売つてもうけるという考えが全然ないわけだ。日本の街路は色とりどりの看板、夜は電光広告、街頭放送の喧騒で一杯だが、ソ連ではこれが全くない。活気なく見えて当然だろう。S-ro Anikejevは「その通り、国によつて常識は違う。こちらでは病人がいるとか、子供の進学とかで家計が苦しい等、想像できない。（医療、教育は無料）」と書いてきた。どこの人とも、理解するには話し合いが必要だ。 (終り)



(S-ano Sergej V.Filippov とアンガラ川|の岸で。バイカル湖からの流出口のすぐ下流。)

シベリア旅行あとがき

苦小牧 1983.03.25

Karaj geamikoj,

お褒りありませんか

昨年シベリアで会った二人から、時々便りが来ています。

イルクーツク～バイカル湖に同行したセルゲイ・フィリポフさん11月に出した手紙の返事が2月末。ずいぶん遅くなりましたが、高血圧でしばらく入院していたためだそうです。目も悪くなり、しばらくは全々書けなかつたそうですが、この手紙、前と同じきちんとした字でした。こちらからの手紙は、少し大きく、はつきりした字で書かねばなるまいと思つています。彼の手紙の一部を紹介します。

「・・・小樽市民訪問団の来訪は、私にとってほんとに楽しい出来事でした。もう余命長くない私の、一生忘れられない美しい夢のような思い出として残るでしょう。

読売新聞の記事(1982.9.1)について、不正確な点は気にしません。どこでもあること。ブダペストの世界エスペラント大会(1966年)では、かなりていねいに取材されましたが、記事を見ると、名前も、内容も変つていましたから。人間は間違いをおかすものです。」

ナホトカまで来てくれたウラゾウオストツクのセルゲイ・アニケエフの家では11月、次男エウゲニアが生まれ、5才の長男と2人の子の世話で大変のようです。なお彼の紹介でカムチャツカのペトロパブロフスクに友人がふえました。ラトビア出身で休暇には帰るとか。東経160度から24度(ソ連・ポーランド国境の北)へ、時差9時間の旅。広い国ですね。奥さんはカムチャツカ原住のイテルメン族とロシア人の混血。原生林、火山、

ヒグマ等、カムチャツカの自然をうつした絵はがきを送つて来ました。

去年みたとおり、あそこは多民族国家ですね。ルーブル紙幣をみると15のことばが出ていますが、日本では考えられないこと。それに出ていない朝鮮語、イディツシ(ユダヤ人ドイツ語)も含めると80語以上とかいいます。ハバロフスクで買ったイディツシ語の新聞について年賀状に書いてから原稿を頼まれて送つたところです。(南西エスペラント連盟機関誌に)

3月8日 ソ連観光省の人が来て旅行コースの説明がありました。カムチャツカにはインツーリストがなく、観光客を外国から入れないようですが、学術団体の交流としてなら、可能性があるとのことでした。

この間から中曾根さん、かなりぶつそなな事をしゃべっていたが、この頃少し控えているようですね。元防衛庁長官だった赤城さんの本「日ソ関係を考える」を読みましたが、ひとつひとつ納得できる論理で感心しました。一読を薦めます。

それと、もう一冊最近読んだのが、高杉一郎著「夜明け前の歌」(岩波書店発行)日本、中国にも来て神近市子、秋田雨雀、魯迅など多くの人々に知られた盲目の詩人エロシエンコの生涯を書いたもの。1922年、日本から追放され帰国しようとしたが、ちょうどロシア革命後の混乱期、ウラジボストクに上つたあと、去年我々が通つたウスリースク、イマン(今のダリニレチェンスク)あたりで入国のチャンスがうかがうところ、結局ハバロフスク迄行けず、中国経由でチタ迄行つたがだめで、北京へ引返す・・・などくわしく出ています。彼はエスペラントや日本語で書きましたが、スターリン時代のソ連では不遇だつたようです。

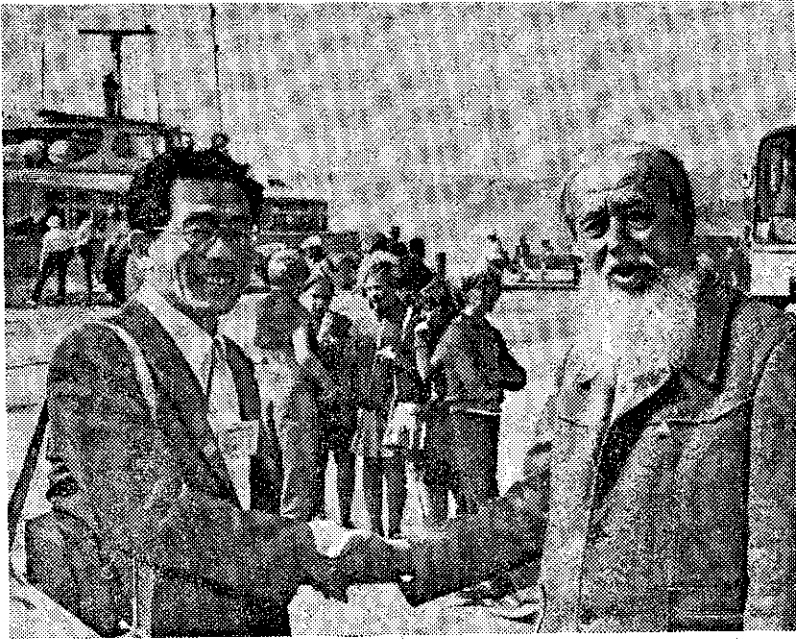
(星田)

※ 読売新聞の記事は別掲を参照・・・Red.

坂本廣明前特派員と握手したヒグマの老人・セルゲイさん

「なにか……」と絶句した。(坂本廣明前特派員と写真も)

一九八二年九月一日付
読売新聞北海道社会版に掲載のもの



隣人の顔

■ 6 □

「やア、星田さん。私だよ、セルゲイだ」

バイカル湖畔で、満面に笑みをたたえた、風格あるソ連の老人が、団員の星田淳さん(五)(苫小牧市糸井)に駆け寄り、がっちり握手した。

イルクーツク市に住むセルゲイ・フィリポフさん(八三)も、國際共通語・エスペラントを通して知り合った。もう二十年近くも文通を続けているが、対面したのは初めてだ。

「やア、セルゲイ。お孫さんは元気かい」

「元氣どころか、いたすら盛りで、まいってるよ」

初めて会ったというのに、よそよそしさは全くない。それもそのはず、これまでの文通で、お互い、家族構成から生活ぶり、収入までも熟知しているの

バイカル湖畔で、星田さんと初対面、がっちり握手したヒゲの老人・セルゲイさん

文通の旧友、温かく

セルゲイさんは、ボルガ河畔の出身。ロシア革命軍に参加、バイカル地区の戦いに派遣されて、この地に残った。日本では、さしずめ明治の気骨がある老人だが、ユーモアとサービ

ス精神がたつ盛で、市内を案内したり、話がとぎれるとマッチの手品を披露したり。星田さんの旅の疲れを、すっかりいやしてくれた。

ソ連では税関で、地図や現地の友人の住所・氏名を書いたメモを没収されたり、日本から手紙を出すに、相手の人に迷惑がかかることも聞いた。

と云うがセルゲイさんは平気の平左。星田さんにバイカル湖の地図や絵はがき、本などをプレゼント。

「わが国では、エスペラントを狭く思っていないらしい。愛国心が少ないというんだ。だが愛国心と、外国の仲間とつき合うのは別だ。これからも大いに友情を深めよう」と、意気軒高。

だが、別れる時、星田さんの両手を、力いっぱい握りしめながら「もう、会えないかも知れないが……」と絶句した。

(坂本肇明前特派員写真)

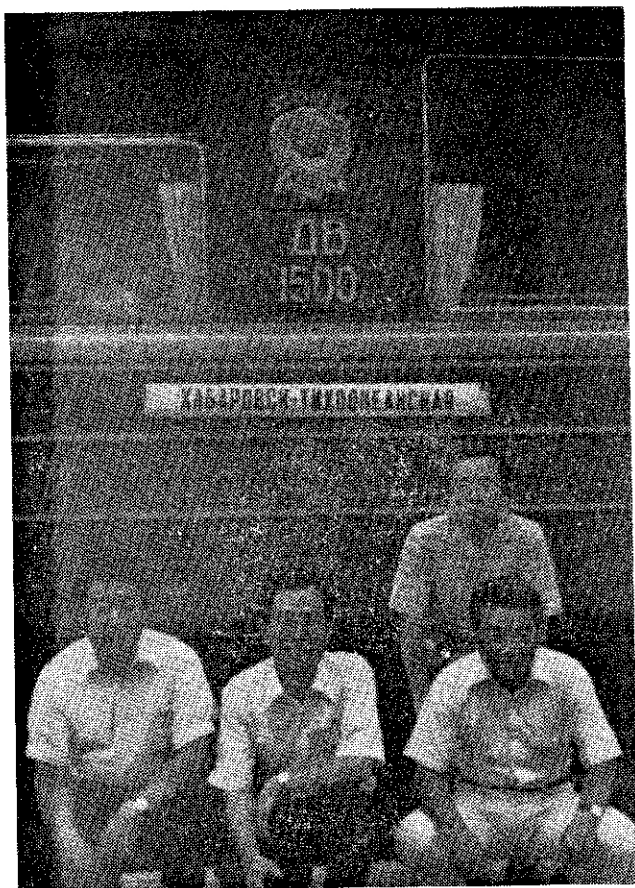


(Байカル湖畔にて。 S-ano S·V·Filippov を囲んで。)

ハバロフスク街頭での交流風景：少女たちと記念品交換．

（通りがかりの少女，外国人とみると絵はがき，
バッチなど渡して，ボールペンなどと交換する。）





ナホトカの太平洋駅・シベリア鉄道の起点にて。
客車にかかった札は ハシロフスキー太平洋